

	公立 A 高校	私立 B 高校	公立 C 高校	私立 D 高校
日本版ランキング発表イベントに参加した理由は?	以前から、日本版ランキングに興味を持っていたので今回参加した。ランキングについての説明を聞いて、目に見えてわかる、数字で測りやすいハード面よりも、測りにくいソフト面を重視したランキングであることが理解できた。	進路部の先輩教員に参加を勧められたから。本校の掲示板には日本版ランキングのポスターが貼ってあり、以前から自分自身も興味を持っていた。この順位がどうやって決まっているかを知りたかった。教育力、研究力、資金獲得力を基にランキングがつくられていることがわかった。	大学の新しい動きについて情報収集するため。自分が大学生だった時代と今の大学の違いを、ランキングという客観的な視点で確認したかった。基調講演で聞いたシンガポール国立大学の話は印象的で、学生に国を動かす力、国際的に稼ぐ力を身に付けさせるために、国境や分野を越えて連携している点はすごいと思った。	入試が大きく変わる新高2生を指導するうえでは、社会の変化をふまえて指導する必要性を強く感じている。日本国内だけでなく世界の潮流について情報収集するために参加した。シンガポール国立大学の話は、高校現場ではなかなか聞けない話。社会と向き合う大学の姿勢を肌で感じることができ、得難い勉強の機会となった。
「THE 世界大学ランキング 日本版2019」で注目した大学は?	国際教養大学、お茶の水女子大学、立命館アジア太平洋大学 (APU) 国際教養大学の教育については話を聞いたことがあり、順位の高さに納得。実際に視察したいと思っている。お茶の水女子大学は、「新フンボルト入試」を授業の参考にしており、取り組みに注目している。APUは、出口学長の考え方が大学の取り組みに生かされており、それが順位に表れていると感じた。	国際教養大学と横浜市立大学 国際教養大学は本校からの進学実績がないため、初めて知った。順位が高いのはなぜか、後できちんと調べてみたい。順位が上昇した大学としてカンファレンスの中で紹介されていた横浜市立大学は、本校から毎年進学者がいる。あらためて上がった理由を調べようと思った。	会津大学、豊橋技術科学大学、国際教養大学 教育充実度で、地方の公立大学のスコアが高いことがわかった。地元志向の強い本校の生徒に、このデータを見せて他地域の大学にも目を向けさせ、進路選択の幅を広げたいと思った。特定の項目で上位の大学の場合、「〇〇の分野で社会人として活躍したいなら△△大がよい」というようにデータを基に生徒に勧めやすい。	シンガポール国立大学 同大学の取り組みを基調講演で聞いて、とてもワクワクした。入学後20年間学籍が有効で、社会人が大学に戻り、学生や教授と共に理想的な学び合いを実現している。大学が社会の中心的な役割を担っていることに感銘を受けた。
進路指導へのランキングの活用について	偏差値によらない、世界的な大学選びの基準を生徒に示すことで、自分の人生設計や世界の動向を意識した進路選択の指導ができると思う。ネームバリューのある大学が必ずしもよい教育をしているとは限らないので、その視点を生徒に持たせたい。日本版で使用している学生調査の質問項目は高校でも使えると感じた。自分の学習スタイルに合った大学選びができるのではないかな。	校内の掲示板上に、偏差値ポスターと日本版ランキングのポスターを並べて貼っている。今は偏差値ポスターのほうに生徒の目は行きがち。しかし今後は、「世界基準の物差しで、あなたの志望大はどうなっているか、調べてみよう」と生徒に指導してみたい。偏差値は高くなくとも、教育熱心な大学など、 偏差値とは異なる視点でも大学選びを考えさせたい。	現在はランキングポスターを進路部の掲示板上に貼っている。今後は、各クラスに、できれば2年生から掲示したい。 分野別ランキングを活用して 、例えば、国立大志望者には国際性のスコアを比較して、国際的な研究に組み込もうな大学を調べさせたり、私立大志望者には教育成果に注目して、キャリア教育の充実している大学を調べさせたりする指導ができると思った。	大学で教育改革が進んでいることに、高校の教員は気づいていないように思う。 日本版ランキングは、そうした大学の改革を高校側に伝えるものだと思った。
高校の進路指導は今後どのように変化するか?	卒業時の進路選択という「狭義」のキャリア教育ではなく、生徒一人ひとりが 人生として自分のキャリアを考えるキャリア教育が行われるようになる と考えている。自分のキャリアを考える機会を入学時から頻繁に設けるようになるのではないかな。将来的には、進路アドバイザーという専門職を高校に配置することもあっていいかな。	保護者からは、「この大学に進学すると、どんな会社に就職できますか」と聞かれることが多い。しかし私は、自分が疑問に思っていることを追究する場所が大学だと考える。教員が授業を通して生徒の「もっと知りたい」という気持ちを育てることが大切。 自分の探究心を満たせる大学を選ぶようになれば 、大学進学後も積極的に勉強するようになると思う。	大学と同じく高校でも、教員が独自に教育プログラムを開発し、そのために 必要な資金を学校外から引っ張ってくる ことが求められるようになるだろう。現在、大学とは課題研究における共同研究や英語論文の指導で連携しているが、 教育プログラムの開発でも大学と連携を深めたい。 幸い、課題研究の題材は本校から無限に思えるほど出てくるので、PBLの課題探しで困っている大学があれば、ぜひ一緒に取り組みたい。	これまでも多くの入試改革がなされてきたが、その都度、競争を激化させてきたように感じる。 改革の目的は子どもを「育てる」ことにあるのだが、「競争を勝ち抜く」ことに高校では指導の重点が置かれている。 また、本校のインターナショナルコースの生徒は、日本の高校生とは物事に気づく力(視点と視野)がずいぶん違う。世界に出れば、日本の高校生も世界の高校生と渡り合うようになる。基礎学力はもちろん、 視野を広げる必要性を痛感している。
大学の教育に対する期待は?	今までねじれていた高大接続が入試改革によって改善し、 つながっていくと期待している。 大学と高校の結びつきを強くして、高校教員に「主体的、対話的で深い学び」の必要性を、より感じさせるようなことをしてもらいたい。大学が起点となって、日本社会の教育を変革することを期待している。	学生の挑戦を促すような 取り組みを期待 したい。大学は「動いた者勝ち」のところがあるので、自分から動けばいろいろ経験できるが、動かなければ、何も得られないまま4年間が過ぎてしまう。大学が学生に歩み寄り、学生の背中を押してもらいたい。	与えられたテストを求められるまま正答できる力だけでは、意欲ある社会人を育成することは難しいと考えている。「 知らないこと」「今の自分の力では解決できないこと」を、他者の助けを得ながら自分で解決していく意欲を高 大で育成したいと考えている。	シンガポール国立大学が取り組んでいるように、高校生や保護者、高校教員や社会に対して、ワクワクするような働きかけをお願いしたい。大学には、社会の将来ビジョンを描くのに必要な人材や情報、知財などがあるように思う。 社会との関わりを高めてほしい。

2019年の日本版ランキングが発表された「大学改革カンファレンス2019」に参加した高校教員に、今回の結果を見ての感想と、進路指導の中での生かし方を聞いた。

ランキングで可視化された教育力を 高校教員はどう見たか?

Report



*[大学改革カンファレンス2019] (2019年3月27日実施)に参加した高校教員へのヒアリング結果

2018年11月時点で、日本版ランキングの高校教員の認知度は72.7%。そして約4割の高校では廊下や進路指導室にポスターを掲示するなど、高校でのTHEランキングの活用は進みつつある。日本版の発表イベントにも関心の高い高校教員が参加した。一部の教員に協力を仰ぎ、大学の教育力について会場でヒアリングした結果をまとめたのが上の一覧だ。

参加理由や注目した大学、ランキングの活用イメージから、高校教員は大学の教育力を次のように見ていると言える。

- ①教育力を「偏差値とは異なる大学選びの軸」として見ている
 - ②教育充実度や国際性のスコアが高い「特色ある大学」に注目している
 - ③「世界」基準で見ている
- 「偏差値とは異なる視点でも大
学選びを考えさせたい」(B高校)
とあるように、教育力は偏差値と

*ベネッセコーポレーション調べ(2018年11月 高校教員4246人対象)

併用して使用する大学選びの軸として考えられている。これは大学にとって、偏差値とは異なる市場をつくりだせる可能性を意味するものだ。上記の高校以外にも、「中位以下の大学を受験する生徒には偏差値だけで選ばず、こうしたランキングもよく見るように勧める」との意見もあった。

「分野別ランキングを活用」(C高校)や、「大学の改革を高校側に伝えるもの」(D高校)との意見は、大学の自身に注目する視点だと言える。「偏差値によらない、世界的な大学選びの基準を生徒に示す」(A高校)のは、グローバル社会を見据えてのことだ。

この背景には、高校の進路指導において、短期的な大学進学のためだけではない、長期的な人生設計としてのキャリア教育の重要性が高まっていることがある。「人として自分のキャリアを考えるキャリア教育が行われるようになる」(A高校)という回答から、その変化がうかがえる。

高校でキャリア教育の取り組みが進めば、大学の教育力への注目度は一層高まると予想される。自学で学ぶとどのような力が付くのか、エビデンスを用いた高校への情報提供が、これからの募集広報ではポイントとなるだろう。